

フェア提案〈平和と和解〉を考える 選書リスト

※フェアを実施いただける書店様にはPOPおよび推薦文をデータでご提供いたしますので、発注とあわせてお申し付けください。

著者	書名	出版社	刊行年月	本体価	ISBN978-4-	選者	選者コメント
A	「和解」その困難と希望						
1	平和と和解の研究センター／足羽・濱谷・吉田（編著）	『平和と和解の思想をたずねて』	大月書店	10/05	3,400	272-43084-0	
2	アモス・オズ	『わたしたちが正しい場所に花は咲かない』	大月書店	10/03	1,900	272-43083-3	
3	菅原秀	『ドイツはなぜ和解を求めるのか 謝罪と戦後補償への歩み』	同友館	08/05	1,800	4960-4414-4	伊勢崎賢治
4	伊勢崎賢治	『アフガン戦争を憲法9条と非武装自衛隊で終わらせる』	かもがわ出版	10/02	1,400	7803-0326-1	伊勢崎賢治
5	蓮池透	『拉致 左右の垣根を越えた闘いへ』	かもがわ出版	09/05	1,000	7803-0274-5	伊勢崎賢治
6	蓮池透ほか	『拉致2 左右の垣根を超える対話集』	かもがわ出版	09/12	1,500	7803-0313-1	伊勢崎賢治
B	平和構築という実践						
7	伊勢崎賢治＋マガジン9条（編）	『伊勢崎賢治の平和構築ゼミ』	大月書店	09/12	1,600	272-21101-2	伊勢崎賢治
8	伊勢崎賢治	『武装解除』	講談社	04/12	740	06-149767-2	
9	ロメオ・ダレール、伊勢崎賢治	『ロメオ・ダレール 戦禍なき時代を築く』	NHK出版	07/09	950	14-081220-4	伊勢崎賢治
10	笹本潤	『世界の「平和憲法」 新たな挑戦』	大月書店	10/05	1,600	272-21102-9	
C	体験／記憶／思想化―傷とともに生きること						
11	濱谷正晴	『原爆体験』	岩波書店	05/06	2,800	00-022742-4	
12	石田忠	『原爆被害者援護法 反原爆論集Ⅱ』	未来社	06/08	2,500	6244-1058-2	濱谷正晴
13	ヘレン・エプスタイン	『ホロコーストの子供たち』	朝日新聞社	84/06	1,300	02-259356-6	濱谷正晴
14	島本慈子	『戦争で死ぬ、ということ』	岩波書店	06/07	740	00-431026-6	濱谷正晴
15	宮地尚子	『傷を愛せるか』	大月書店	10/01	2,000	272-42012-4	
16	プリーモ・レーヴィ	『溺れるものと救われるもの』	朝日新聞社	00/07	2,800	02-257491-6	宮地尚子
17	A・ビーヴァー序文、H・エンツェンスベルガー後記	『ベルリン終戦日記 ある女性の記録』	白水社	08/06	2,600	560-09208-8	宮地尚子
18	マリタ・スターケン	『アメリカという記憶 ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』	未来社	04/11	3,800	624-11177-9	宮地尚子
19	ケネス・E. フット	『記念碑の語るアメリカ 暴力と追悼の風景』	名古屋大学出版	02/08	4,800	8158-0440-4	宮地尚子
20	こうの史代	『夕凧の街 桜の国』	双葉社	04/10	840	575-29744-7	宮地尚子
21	中澤正夫	『ヒバクシャの心の傷を追って』	岩波書店	07/07	2,000	00-001941-5	
D	「戦後」が隠蔽したもの						
22	家永三郎	『戦争責任』	岩波書店	02/01	1,400	00-603050-6	吉田裕
23	油井大三郎	『なぜ戦争観は衝突するか 日本とアメリカ』	岩波書店	07/04	1,200	00-600174-2	吉田裕
24	五十嵐惠邦	『敗戦の記憶 身体・文化・物語1945-1970』	中央公論新社	07/12	2,500	12-003898-3	吉田裕
25	豊田祐基子	『「共犯」の同盟史 日米密約と自民党政権』	岩波書店	09/06	2,800	00-022571-7	渡辺治
26	熊谷伸一郎（編）	『私たちが戦後の責任を受けとめる30の視点』	合同出版	09/09	1,800	7726-0394-2	中野聡
E	アメリカ／沖縄／日本―ねじれと亀裂						
27	K・J・ヘイガン、I・J・ピッカートン	『アメリカと戦争 1775-2007』	大月書店	10/06	2,800	272-53042-7	
28	ジョエル・アンドレアス	『戦争中毒 アメリカが軍国主義を脱け出せない本当の理由』	合同出版	02/10	1,300	7726-0299-0	多田治
29	中野聡	『歴史経験としてのアメリカ帝国 米比関係史の群像』	岩波書店	07/09	3,500	00-002537-9	
30	マイク・モラスキー	『占領の記憶／記憶の占領 戦後沖縄・日本とアメリカ』	青土社	06/03	3,200	7917-6220-0	宮地尚子
31	林博史	『沖縄戦が問うもの』	大月書店	10/06	1,800	272-52082-4	
32	林博史	『沖縄戦と民衆』	大月書店	01/12	5,600	272-52067-1	
33	喜納昌吉	『沖縄の自己決定権 地球の涙に虹がかかるまで』	未来社	10/05	1,400	624-30114-9	
34	新崎盛暉ほか	『観光コースでない沖縄 戦跡／基地／産業／自然／先島』	高文研	08/06	1,900	8749-8404-8	多田治
35	石原昌家（編）	『オキナワ 沖縄戦と米軍基地から平和を考える』（DVDブック）	岩波書店	06/09	4,200	00-130155-7	多田治
F	国家／戦争／プロパガンダ―起源と現在						
36	エルネスト・ルナンほか	『国民とは何か』	インスクリプト	97/10	3,500	309-90186-2	森村敏己
37	パトリック・J・ギアリ	『ネイションという神話 ヨーロッパ諸国家の中世的起源』	白水社	08/06	3,800	560-02632-8	森村敏己
38	ジョージ・L・モッセ	『英霊 創られた世界大戦の記憶』	柏書房	02/05	3,800	7601-2217-2	森村敏己
39	ジョージ・L・モッセ	『フェルキッシュ革命』	柏書房	98/10	5,200	7601-1681-2	深澤英隆
40	シュテファニー・フォン・シュヌーアバイン	『現代社会のカルト運動 ネオゲルマン異教』	恒星社厚生閣	01/09	5,200	7699-0943-9	深澤英隆
41	マックス・ホルクハイマー、テオドル・アドル	『啓蒙の弁証法 哲学的断想』	岩波書店	90/	1,200	00-336921-0	深澤英隆
42	オルハン・パムク	『雪』	藤原書店	06/03	3,200	89434-504-1	足羽與志子
43	ハンナ・アーレント	『エルサレムのアイヒマン 陳腐な悪についての報告』（新装判）	みすず書房	94/08	3,800	622-02009-7	足羽與志子
44	高木徹	『ドキュメント 戦争広告代理店』	講談社	05/06	619	06-275096-7	伊勢崎賢治
45	P・W・シンガー	『戦争請負会社』	NHK出版	04/12	2,500	14-081010-1	伊勢崎賢治
46	アンヌ・モレリ	『戦争プロパガンダ10の法則』	草思社	02/03	1,500	7942-1129-3	伊勢崎賢治
G	征服と支配に終止符は打てるか						
47	山内進	『北の十字軍 「ヨーロッパ」の北方拡大』	講談社	97/	1,900	06-258112-7	落合一泰
48	バルトロメ・デ・ラス・カサス	『インディアスの破壊についての簡潔な報告』	岩波書店	92/10	560	00-334271-8	落合一泰
49	宮地尚子（編著）	『性的支配と歴史 植民地主義から民族浄化まで』	大月書店	08/02	2,800	272-35027-8	
50	クロード・レヴィ＝ストロース	『神話論理』I～V	みすず書房	06～	価不同	622-08151-7	足羽與志子

エルサレム奪回が不可能になったカトリック世界は、そのエネルギーを北方ヨーロッパの異教徒根絶に振り向けた。目的を変更した十字軍的精神は、さらに新大陸へと拡大していく。アメリカ大陸における殺戮と搾取の実態を暴露し、スペイン王室に告発した1542年の書。自身が植民者だったが回心して宗教者となり、平和的な布教が王室の責務と説いた。

神話の中では暴力、破壊、殺人、近親相姦、裏切り等がその他の多岐にわたる人と自然の行為とともに語られる。平和や和解についての全く異なる次元を読み解くことができる。

「原爆否定の思想」―「この思想形成の必然は被爆者の〈生〉そのものの中に在る」。この命題に石田忠がこめた意味は何か？一人の社会調査家の探究と思索のプロセスを跡づける。ホロコースト生存者の子供たちと、ナチス幹部を父親にもつ子供たち。歴史にとらえられた彼らは、「こんぐらった糸の両端」をときほぐし、真実と向き合うことで希望を探求していく。「戦争による死」を知り、「悲しみの底」に降りることで、著者は、「戦後生まれの目で、戦後生まれにも通じる言葉で」、「戦争のエキス」を語り直そうとする。

ホロコーストから生き延びた強さと、そこでの傷、そして生き延びたゆえにおいかけくる傷や罪悪感について深く描かれている。著者匿名の日記。終戦後の悲惨な状況を女性が生き延びるということのリアルな意味を教えられる。鮮明で誠実な記録を残してくれたことに感謝したい。ヒロシマのあとを生きる女性。彼女の目に映るものこそ、傷の風景にほかならない。

アジア・太平洋戦争の開戦に至る歴史的経緯をも視野に入れながら、戦争責任の問題を、誰の、誰に対する、どのような責任か、という視角から包括的に論じた著作。「戦争の記憶」はナショナリズムの中核に位置し、自国の戦争を正当化する機能を果たすことが多い。和解の障害となる「戦争の記憶」の相克を、日米の戦後史に即して明らかにする。独特の平和意識が形成される過程は、日本が敗戦のトラウマを克服していく過程とも重なっている。その中で、日本人が忘却してしまったことに焦点を合わせた著作。戦後保守政治を、日米の密約の歴史として描いた労作。保守政治がどんなに密約に固執し、国民に日米同盟の真実を隠そうとしてきたかがわかる。一九七〇年代生まれ以降の若い世代の著者たちが「戦争責任」を「戦後責任」としてどう受けとめていくかを語り、問う本。

アメリカはなぜ、かくも戦争をしたがるのか。独立戦争から9・11テロまで、アメリカが戦争を繰り返してきた歴史の実態を、マンガでわかりやすく解説。実際の基地・戦跡フィールドワークのツアーから生まれた本。本書の改訂の経緯自体が、時代とともに沖縄が経た変化を映している。DVDIにはわかりやすいナレーションつきの映像に加え、七五〇点もの沖縄戦の写真が収録されており、戦場で人々が置かれた状況を視覚的に把握できる。

ルナンとフィヒテという、それぞれフランスとドイツの国民概念を代表する二人の思想家の議論を提示した上で、それが含む問題点を分析した論集。現代の民族対立の起源を中世に求め、民族という概念がいかに歴史的に根拠を欠いたものであるかを論証した中世史家の作品。第一次世界大戦ののち、戦没者を英霊として崇拜することで国家が国民を戦争に動員し、総力戦を可能としたプロセスを解明する。ドイツ・ナショナリズムの中の民族神秘主義的なフェルキッシュ思想がいかにナチズムを生み出しました「裏切られた」かを跡づけた記念碑的作品。現代ドイツの異教主義的運動のフィールド調査にもとづき、こうした運動が、なお排外主義や民族主義と容易に結びつく性格を持っていることを明らかにする。神話やロマン主義はしばしば平和を脅かすが、啓蒙の名のもとに指弾すれば事足りるだろうか。ナチズムの経験を背景に、啓蒙もまた神話化され野蛮に転落しうることを描き出す。トルコの架空都市でのイスラム原理主義、世俗主義、国家組織の抗争。テロリズムとは一括できない状況の重層性と問題の普遍性を示す、優れた民族誌的寓話である。ユダヤ人虐殺の責任者に悪の陳腐さを見ると同時に、彼を裁く側の欺瞞性を指摘した。善悪の政治性、人間性についての冷徹で鋭利な批判は、読者に思考の停止と安住を許さない。民主主義に殺戮行為をさせるには？

軍事の民営化抜きに現在の安全保障は語れない。同じ「殺す正義」のつくられ方がいかに歴史上、そして今でも繰り返させられているか。